

令和4年度 第2回丹波市総合教育会議 会議録（要約）

日時：令和4年12月22日（木）午前10時26分～午前11時30分

場所：丹波市役所山南支所3階 教育委員会会議室

出席者

市長	林 時彦
教育長	片山 則昭
教育長職務代理人	深田 俊郎
教育委員	横山 真弓
教育委員	安田 真理
教育委員	上羽 裕樹
副市長	細見 正敏
総務部長	太田 嘉宏
教育部長	藤原 泰志
教育部次長兼学校教育課長	池内 晃二
教育部次長兼教育総務課長	足立 勲
教育部社会教育・文化財課長	山内 邦彦
教育部恐竜課長	田原 弘義
教育部教育総務課総務係長	足立 真澄
まちづくり部長	井尻 宏幸
総務部総務課長	荒木 一
総務部総務課総務係主幹	青木 明美

傍聴者 0名

1 開会

太田部長

2 市長挨拶

林市長

3 協議事項

(1) 令和5年度 教育関連主要施策について

○事務局から別紙「令和5年度丹波市の教育（実施計画）重点施策（案）」のとおりに説明

○片山教育長

【①-1】

別紙「令和5年度丹波市の教育（実施計画）重点施策（案）」について、先ほど開催した教育委員会の中で教育委員から以下のような意見があった。

- ・1人1台のタブレット端末の活用状況の確認（不登校の児童生徒への対応への活用など）
- ・博学連携という立場から丹波市内の施設を活用して小中高において様々な形で支援することが大事である。
- ・保育士、先生、看護師不足の状況で「帰ってこいよ」のまちづくりを進めるためには、丹波市で働く魅力を小中学校のうちから養っていくべきである。
- ・女子高校野球を今後も丹波市で継続していくには課題もある。

【①-2】

全体を通しての課題は、コロナの影響で人と人との関係が色んな形で分断されている中で先生方の研修によってどう対応するか。それがいじめや不登校の未然防止、主体的・対話的で深い学びに繋がっていくと思うので、令和5年度からはそういったところに力を入れていきたい。

【①-3】

12月に全学校を見て回った感想は以下のとおりである。

- ・前期に訪問した時よりも、先生と子供の間が非常に近い関係であり、お互い話しやすい雰囲気の中で授業が進んでいる。
- ・「対話をさせる」「考えさせる」ためにタブレット等を有効活用している。
- ・管理職と先生方の関係も良好であり、学校全体が非常に明るく感じた。
それがいじめや不登校の未然防止にも繋がると思うので、良い方向に向かっていると感じる。
- ・良い取り組みについてはもっと積極的に発信してほしいという意見を聞いている。丹波市内の小中学校の記事は、子供のやる気にも繋がっていくと思う。

○林市長

【②-1】

先生は知識を教えることも大切だが、子どもとの人間関係を築くことが大切である。一人の人間として生徒と向かい合って話し、卒業しても記憶に残る先生を目指してほしい。（①-3 関連）

【②-2】

地域の市民と子供たちの関わりとして特に挨拶をしっかりすることが大切である。

【②-3】

様々な要因はあると思うが、今年は転入超過となった。保育士、先生、看護師不足を解消するためには丹波市に帰ってきてもらうことが必要である。そのためふるさと教育を推進し、「丹波市に帰ってこよう。生きていこう。」と地元で愛着を持てるようにしていければと思う。(①-1 関連)

【②-4】

地域の市民がクラブ活動の指導に関わり、成果を上げている事例もある。一方で青垣ではバレーボールをしている子どもが青垣中学校にはバレー部がないので遠くの中学校へ進学したという事例も聞いた。帰ってくる子どもを育ててほしいと思う。課題はあると思うが、推進していただきたいと思う。

○上羽委員

【③-1】

2月から教育委員に任命され、様々な研修をしてきた。先日も先生と子供の人間関係について研修をしたところである。東条では小中一貫校ができており、小学校と中学校の先生が生徒に関する情報共有を行うことで先生と子供の関係が良好であると聞いた。丹波市でも幼小中の連携が課題となっているが、小さいころからフォローしていくことが大切である。(②-1 関連)

【③-2】

クラブ活動の地域化について、高額なユニフォームやジャンパーなどの購入に係る費用の部分で何らかの補助がないと家庭の事情等で参加できない状況が出てくるのではないかと懸念する。(②-4 関連)

○池内次長

【④-1】

小中一貫のフォロー体制について、全ての子どもについてはではないが、サポートファイルを活用し、支援を要する子については幼小中で連携を図っている。(③-1 関連)

【④-2】

部活動について、費用面については明確なものがない状況である。青垣のバレーは非常に盛んで強いため、そういった子どもが大阪へ進学してしまい、地元に残れないような状況がある。クラブ活動の地域移行の中でそういった子どもが地元でやりたいことを継続できる状況を作っていきたい。(②-4、③-2 関連)

○林市長

【⑤-1】

クラブ活動において、先輩が後輩の指導を行うという関係性を大切にしたい。市職員も地域の中で自然な関わり方として後輩の指導を行うべきであると考えている。そういった関わり方がふるさと教育であり、その結果、子どもたちは故

郷に良い思い出を作り、将来帰ってくることに繋がると思う。(②-4、③-2、④-2 関連)

○片山教育長

【⑥-1】

氷上高校のバレー部には地元の子どもは少ないことが多く、野球部にも地元の子どもは少ない状況である。高校とは地元の子どもを少しでも入れてはどうかと協議している。(④-2、⑤-1 関連)

【⑥-2】

認定こども園から小学校、小学校から中学校、中学校から高校へのそれぞれの連携に力を入れていかないと結果的に不登校やいじめに繋がることもあるので、特に力を入れてやっていきたい。(③-1、④-1 関連)

○安田委員

【⑦-1】

南小学校ではコミュニティスクールの関係者から声掛けをして学校の中の困りごとを共有することで地域と学校の協力体制ができている。できるだけ学校の中に地域の方が入ってきて学校の中で地域の方と子どもが関わる時間を作ることで、子どもたちは友達、親や先生に話せないことも地域の方に相談できるというような環境づくりのため、地域を巻き込むよう試行錯誤をされている。

○池内次長

【⑧-1】

南小学校の取組については、今年度文部科学大臣賞を受賞する予定である。学校が困りごとなどを包み隠さずオープンにすることは困難だが、藪内校長は人間関係を上手に構築しながら実施している。その取組を他の学校に広げ、地域との繋がりを強化していくことが今後の課題である。(⑦-1 関連)

○林市長

【⑨-1】

先日南小学校で子供食堂を利用させていただいた。雰囲気がとても良く、地域が子どもを育てているという理想的な形であると感じた。春日部小学校でも「地域の子供たちは地域が育てる」と掲げている。(⑦-1、⑧-1 関連)

○安田委員

【⑩-1】

活動の中で大切なのは、推進員や地域の方の動きが学校にとってプラスであるかの確認や、事業目的の確認などを行うことである。地域の活動が学校の負担とならないように工夫されている。沼貫の広報誌と南小学校の広報誌の両方で地域活動を発信しており、子どもの姿を見たい、サポートしたいということで関わってくれる保護者が増えてきた。そういうことを楽しむ雰囲気ができること

により子どもたちも主体的に行動できていると感じている。(⑦-1、⑧-1、⑨-1 関連)

○横山委員

【⑪-1】

市職員が生き生きと働く姿を子どもたちに見せてほしい。丹波市、丹波市の学校現場、こども園等で働いたら生き生きと充実した生活が送れる。そういう姿を子どもたちはよく見ている。部活動の指導としてそういった仕組みがあるとよいサイクルになると思う。(⑤-1 関連)

【⑪-2】

子どもが生き生きと学校生活を送るためには、先生がいかに生き生きと働けるかということに繋がる。子どもの状況変化に合わせ、大人側も変化していくべきである。スクールカウンセラー等の専門スタッフを充実させ、先生が活動しやすい環境を提供することも大切である。

【⑪-3】

メディアをうまく活用して改革の取組を発信していくことも大切である。

○池内次長

【⑫-1】

先生の働く環境は多様化、複雑化しており、学校現場が本来抱えなくてもよいことまで抱えている状況が増えている。教育委員会としては、学校現場への負担を軽減するためにもそういった課題を整理していく必要がある。(⑪-2 関連)

○林市長

【⑬-1】

市長就任時には笑顔で挨拶をしましよと職員に伝えた。生き生きとした職員の働く姿を市民に見せていきたい。先生が子どもの方を向いて、子どものことを一番に考えられるよう時間の確保ができるように、市としてはスクールサポートスタッフの配置などで支援していきたい。(⑪-1、⑪-2、⑫-1 関連)

○深田委員

【⑭-1】

スクールサポートスタッフの全校配置については予算などの課題もあると思うが、これを切り口にして学校現場への支援がどうあるべきかということを考えてほしい。(⑬-1 関連)

【⑭-2】

ふるさと意識の醸成のために幼小中を対象として将来に繋がっていくような施策を進めてほしい。その中で認定こども園との連携強化のため、担当を教育部に移せればと思う。(⑤-1 関連)

【⑭-3】

部活動について、一度地元を離れると戻ってくることは困難であると感じている。お金の面等の課題もあるが、連合チームを組むなど地域で部活動を支えて子どもたちが丹波市で活動できれば良いと思う。(②-4、③-2、④-2、⑤-1、⑥-1 関連)

【⑭-4】

学校は教え込みの教育から子どもが自分で自分を伸ばしていくような教育に変わりつつある。南小学校の話があったが、そういったモデルケースを広めてほしい。子どもを育てるにはマンパワーが必要であるため、スクールサポートスタッフの配置も有効的であるし、市役所の職員も子どもたちと積極的に関わってほしい。(⑦-1、⑧-1、⑨-1、⑩-1 関連)

○林市長

【⑮-1】

先生が子どもたちと関わる時間を増やしたいと思われていることはうれしいことである。その思いを実現するためにスクールサポートスタッフの配置等で支援していきたい。(⑪-2、⑬-1、⑭-1、⑭-4 関連)

【⑮-2】

0歳から15歳までの切れ目のない教育に取り組めるよう検討していきたい。
(⑭-2 関連)

【まとめ】

本日の協議内容については、市長部局は今後の政策協議の中で活かし、教育委員会は教育現場であったり、予算に反映させていく。

4 意見交換

(なし)

5 その他

(なし)

6 閉会

太田部長